



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田  
信の白浜だより(その15)

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その15). うみひろも 2011, 89: 18-20

ISSUE DATE:

2011-11-16

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180237>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

4. きらめく動物たちの命と海  
【久保田信の白浜だより(その15)】

## 漂着した様々なタネとエボシガイ

2005 年 9 月 3 日、台風 14 号が紀伊半島に接近中で、白浜町の瀬戸漁港からは 1 隻も船がいなくなり、養殖いけすも岸壁からの接続が解かれた。嵐の前のひっそりとした漁港には、前触れを示すいくつかの漂流物が流れ着き始めた。岸壁のコンクリートスロープ付近で漂っていたのが、久々にやって来たモモタマナの実だった。外側の皮が取れ、繊維質がむきだしになっている。繊維質の内側にコルク質の部分があるので、まさにウキの様な果实だ。どこからどれくらいの期間を漂ってたどり着いたのだろうか？

### 南国のタネの漂着

モモタマナは、わが国では沖縄島以南で樹木として自生しており、枝もたわわに実るので、実際に見たことのある方も多いだろう。インド洋大津波のあった 2004 年末に研究調査したタイ国バンコク付近では、立派な大木となっていた。東南アジアや南太平洋に浮かぶ多くの諸島に分布しており、そこから海流に乗ってタネが分散して分布を広げていく。今回発見したのは、たった 1 個だけのモモタマナの実だったが、白浜にたどり着いても本州では成長できない宿命だ。これは、「無効分散」という悲しい生物学用語の意味する通りになる。

モモタマナには、時折、フジツボの仲間のエボシガイが付着している (図)。エボシガイは、潮間帯には生息しないし、海中に潜っていくら探してもどこにもいない。もっぱら浮遊物に付着して海表面暮らしをする変わり種の甲殻類だ。くっつく材質はなんでもよくて、発泡スチロールからガラス、プラスチックのような人工物、天然の木や植物の種や果实でも、海表面を漂う堅いものなら何でもいい。幼生時代にはプランクトンとして海中を漂って、このような棲家を探す。

木切れに集団でくっついてエボシガイもあった。親戚のフジツボ類に共通した特徴の通り、どの種も雌雄同体なので、これだけの数で寄り合って暮らしていれば、有性生殖も簡単にできてたくさんの子孫を無事に残せるだろう。

漂着してもまだ生きてると、エボシガイは貝殻のような何枚もの石灰質の殻を開けて、中から萬脚と呼ばれる特有の“足”を、扇の様にすばやく広げてはまた中に入れる“魅惑の足招き”を、小刻みに繰り返している。これは、呼吸とともに、水面に浮かぶ微小な有機物の粒を捕らえて食べている動作なのだ。おとなしい海の掃除屋さんだ。

### ハマオモトのタネの漂着

和歌山県白浜町の花とされているハマオモト（ハマユウ）のタネが目に残った。2005年9月4日には2個、翌5日には11個が流れ着いた。台風がもたらす普段より強大な波浪は、この種のタネをあちこちに打ち上げて分散に役買っている。ハマオモトは瀬戸臨海実験所構内のあちこちに生えていて、夏に臭いの良い白い花を開かせる。こちらは、瀬戸臨海実験所が1949年より出版している欧文研究報告の表紙のロゴマークになっている。

ハマオモトのタネは、海をあちこち漂い、分布を広げているが、寒い地方では成長も成熟もできない。自生地 of 北限は太平洋岸では房総半島で、日本海側では山口県である。このような生理的限界があるため、わが国では、丁度、年平均気温が15℃、年最低気温がマイナス3.5℃の等温線と一致した地理的分布を示している。これをハマオモト線（クリナムライン）と呼んでいる。このラインは、他の南方系生物、とりわけ様々な植物や昆虫などの分布の北限ともなっているため、一般的な呼称として「本州南岸線」と呼ばれることも多い。



図．南方系のモモタマナ果実とそれに付着したエボシガイの瀬戸臨海実験所北浜への漂着